金剛石（ダイヤモンド）の語誌

吉野　政治

〔要旨〕「金剛（こんごう）」は金石の中で最も堅固なものを意味する。「金剛石（こんごうせき）」は玉石の研磨に用いられる堅固な石の名にすぎなかった。江戸時代にはすでに装飾品としての西洋の金剛石すなわちギヤマン（オランダ語）が知られていたが、明治時代以降に西洋の服飾文化が流行するとともに日本でも金剛石は宝石として用いられるようになり、上流階級や富裕層の象徴となった。

〔キイワード〕金剛　金剛石　ギヤマン　ダイヤモンド

1　「金剛」という語

「金剛」は仏教語としての性格の濃い語である(1)。仏性の堅剛不壊なることの比喩としても用いられ、釈迦が悟りを開いた坐処を「金剛座」と言い、堅固で動揺しない菩薩の信仰心を「金剛心」、大日如来を智徳開示した部門を「金剛界」、教化しがたい衆生をとらえて済度する羂索を「金剛索」、般若不可空の理を説く教典の名を『金剛般若波羅蜜経』というなど仏教関係に「金剛」は多く用いられている。したがって、「金剛」は五行の金の気が剛毅であることをいうとも言われているが(2)、金石中最も剛健堅固なものの意であって、破砕しえないものは何もないという古代インドの神話の軍神インドラの堅牢無比な武器ヴァジラ（伐折羅）の漢訳として成立した語であるとする仏典に見られる説の方を採るべきであろう。

金剛者、梵云伐折羅。力士所執之杵是此宝也。金中最剛故名二金剛一。帝釈有レ之。（『金剛般若経疏論纂要』上）

金中精牢名曰二金剛一、此宝出二金中一、色如二紫英一、百錬不レ銷、至堅至利、可二以切一レ玉、世所二希有一、故名為レ宝。（『梵網経』古迹、上）

正中有二金剛坐一、賢劫初成、与二大地一倶起、拠二三千大千之中一、下極二金輪一、上斎二地際一、金剛成レ所、周百余歩。言二金剛一者取二其堅固難レ壊、能徂二万物一。

（『大慈恩寺三蔵法師伝』巻三）

2 『本草綱目』の「金剛石」

金石中最も剛健堅固な石は「金剛石」と呼ばれた。現在ではダイヤモンドの名で呼ばれ、宝石として重宝されているこの石は、かつてはその堅さが注目されていただけものである。李時珍『本草綱目』（明・万暦十八年〔一五九〇〕序）の「金石部」は、金類、玉類、石類、鹵石類の四類に分けられており、「宝石」と呼ばれるものは玉類に属するが、「金剛石」は「宝石」ではなく石類に分類され、次のように説明されている（引用は『新註校定国訳本草綱目』春陽堂、昭和四十九年〔一九七四〕刊の訳による）。

釈名　金剛鑽　時珍曰く、この物の砂は玉を鑽り、また瓷を補ふところから鑽といふ。

集解〈時珍曰く、金剛石は西番、天竺の諸国に出る。葛洪の抱朴子に「扶南に金剛が出る。鍾乳のやうな状態で水底の石上に生ずるものだ。体は紫石英に似て玉を刻み得る。人間が水底に潜入して取るのだが、鉄椎で撃つたのでは傷さへ付かぬ。ところがただ羚羊角で扣くとさくさくと氷のやうに崩れるのだ」とある。丹房鑑源には「紫背、鉛はよく金剛鑽を砕く」とある。周密の齋東野語には「玉工が玉を細工するには、恒河の砂を用ゐて金剛鑽で鏤める。その物は形が鼠糞のやうで、青黒色の石のやうな鉄のやうなものだ。西域、及び回紇の高山の頂上に出る（中略）。玄中記には「大秦国に金剛が出る。一名削玉刀といひ、大なるものは長さ一尺ほどある。小なるものは稲、黍ほどのもので、それを指環に着けて玉を刻むといふ」とある。これで観れば金剛にも非常に大なるものがあると見える。印度僧が仏牙と称して貴ぶものはこのものだ。（中略）十洲記には「西海流砂に昆吾石といふがあり、これを鍛へて剣を作れば鉄の如く、光明は水精の如く、玉を割くが如くだ」と記載してあるが、これも金剛の大なるものの例である（下略）。

この「金剛石」がダイヤモンドであることは間違いないよう

であるが、右の引用されている説明の中には正確ではない内容がいくつか見られる。葛洪の『抱朴子』の「鍾乳（しょうにゅう）のやうな状態で水底の石上に生ずる」とあるのは、実際には溜り水の底の砂礫層の礫の表面に、水酸化鉄などによって鍾乳のように膠着しているのであり、また「人間が水底に潜入して取る」とあるのも、実際には地下に井戸を掘り下げて採取するのである（『新註校定　国訳本草綱目』）。時珍がこれらの誤りを訂しえなかったのは、産地が遠方であり、確認できなかったからであろう。「金剛石は西番、天竺の諸国に出る」とあるように、産地として挙げられているのはいずれも外国の地である。「西番」は「今ノ青海、新彊ノ二省、及ビソノ以西ノ地」（『新註校定国訳本草綱目』の注による。以下同じ）であり、「天竺」はインドである。また、『抱朴子』に「扶南に金剛が出る」とある「扶南」は「メコン河下流地域」であり、『齋東野語』に「西域、及び回紇（くわいこつ）の高山の頂上に出る」とある「西域」は広義ではペルシャ・小アジア・シリア・エジプトのことであり、「回紇」は「新彊省トルファンを中心とする地域の古名」である。また、『玄中記』に「大秦国に金剛が出る」とある「大秦国」は「古のローマ帝国」のことであり、『十洲記』に「西海流砂に昆吾石といふがあり」とある「西海流砂」は西番の砂漠地のことである。

ともあれ、この李時珍の文章によって、日本は「金剛石」という名の石の実体と用途を知ったのである（本草書で「金剛石」を載せるのは『本草綱目』が最初である）。

3　金剛鑽と金剛砂

現在の鉱物学では金剛石には三種類あるとされる。①普通の金剛石。②ボーラス bollas（ボルツ Bortz bort とも）。③カーボネード carbonado の三種である。『本草綱目』の「釈名」に挙げられている「金剛鑽」は、この②のボーラス、または③のカーボネードであり、砂状になった金剛石のことである。西岡薫祐著『宝石の話』（古今書院昭和七年〔一九三二〕刊 pp.112–23）には、

ボルツ（Bortz bort boart）（ボルト、ボオルトとも云ふ）暗黒の不完全結晶のもので、屢々放射状構造をなして居り、半透明、又は不透明のものにて、質悪く装飾石にもならぬ金剛石をボルツと云ふ。粉末となりたるボルツは金剛

石を磨くに用ひられ、大きなものは電球のフィラメントに用ふる細い針金を引くダイス（dies）や硝子切に用ふ。

とあり、益冨寿之助氏の『新註校定国訳本草綱目』の注にも、

ダイヤモンドのバラエティで、不純なため黒―灰色を呈し不透明で、劈開がなく（普通のダイヤは劈開完全）そのためダイヤより硬く、その粉末はダイヤを研磨するのに用いられるボーラス bollas（注略）やカーボネード carbonado を指しているようである。思うに金剛鑽の名は、金剛石を鑽する上記変種に対する呼称なのかもしれない。

とあるが、既に江戸時代においても『遠西医方名物考補遺』（宇田川榛齋著・宇田川榕菴校補、天保五年〔一八三四〕刊）に、

天然純粋ノ炭素ハ金剛鑽ナリ。故ニ明亮ノ宝石ナレドモ焼テ黒色トナル。是ヲ以テ炭素一ニ金剛鑽素ト名ヅク。或云金剛鑽ハ炭素ト光素抱合シテ成ル。○或云炭素ハ純粋特立ノ者ナク皆他物ヲ帯ブ。金剛鑽ト雖モ酸素アリ。金剛鑽千分ハ炭素六百四十三分、酸素三百五十七分ニシテ成ル。（下略）　（巻八「炭素」）

という説明がある。

ところで、日本には「金剛石」も「金剛鑽」も産しない。ただ、「金剛鑽」と同様の用途で用いられていた鉱物があり、「金剛砂」と呼ばれていた。

金剛砂コムガウサ　コムガウシャ　（『色葉字類抄』）

用レ之鑽二水精硝子及諸玉石一、凡磁器欲レ穿レ孔者、先以二金剛砂一撮一在二其処一、以二杉木錐一揉二穿其処一、屡而為レ孔、一異也。　（『和漢三才図会』）

玉石具御幸町三条北多二玉人一、水精并珍石以二金剛砂一磨二琢之一、作二雑物一、是謂二玉屋一。金剛砂出レ自二大和国金剛山一。　（『雍州府志』六）

のこぎり〈登切之略〉に金剛砂〈和州金剛山出之砂也〉を塗て玉石の類を切なり。　（『譬喩尽』四）

金剛山ノ金剛砂　（松江重頼『毛吹草』）

この「金剛砂」が「金剛石・金剛鑽」に同定されていた。寺島良安の『和漢三才図会』（正徳二年〔一七一一〕序）の「金剛石（こんがうしやう）　金剛鑽（さん）」の項は『本草綱目』（石部、石類、金剛石〔集解〕）の文章を引用した後、次のように述べている（東洋文庫『和漢三才図会』平凡社の現代語訳による）。

△思うに、金剛石は河内（かわち）の二上（にじょう）嶽の谷〔すなわち山田村領

内」から出る。粗細いろいろで、これを用いて水精・硝子(ビイドロ)および諸玉石を鑽(きり)る。磁器に孔をあけようとすればまず金剛砂一つまみをその場所におき、杉木の錐(きり)でしばしばもみ穿(うが)つと孔があく。一つの不思議である。

（雑石類、金剛石）

また、貝原益軒『大和本草』（宝永五年〔一七〇八〕）にも、

金剛鑽　典籍便覧ニ曰一名ハ金剛砂。出ニ西番深山之高頂人不レ可レ到云々今人以レ之刻レ玉ヲ補レ瓷故曰レ鑽○河内国金剛山下ヨリ出ニ金剛砂一。俗ニアヤマリテコンガウシヤウト云。同国飛鳥川ニモアリ。未レ聞ニ他土之所一レ産。大和ニモ飛鳥川アリ。ソレニハ非ズ。是ヲ用テ玉ヲスリ石ヲミガク。

とあり、江戸時代中期に中国の博物学を集大成した形で編纂されている百科全書『庶物類纂』においても、

金剛石　一名削玉刀〈太平御覧〉一名金剛鑽〈本草綱目〉一名代羅闍〈西域記〉一名金剛砂〈華夷花本考〉俗名各毋各蕪舎蕪(コムカウセウ)〈河内州〉

とある。

漢籍の文章だけで判断するしかなかった当時の日本においては、同じ用途で用いられ、同じような名を持つ「金剛砂」を「金剛石・金剛鑽」に同定したのは無理のないことではあるが、やがて「金剛砂」は漢名「合玉石」であり、「金剛鑽」とは別のものであると訂正されることになる。鉱山学の家系を嗣ぐ佐藤信景とその孫信淵による『土性弁』（享保九年〔一七二四〕序）に、

合玉砂一名那玉砂、俗に金剛砂と云ふ。玉石類を磨礪する沙なり。稜角ありて極て堅硬なる沙なり。黄赤色と赭黒色なるも有て、大なる者にて、玉器及び硝子等を彫画するに宜きを以て、或は「ギヤマン」石と呼ぶ。今河内の金剛山、及和州伊駒山、丹波、丹後、伊予、土佐、其他諸国より出づ。讃岐の香川郡には、頗る大塊にして五六分以上なるを生ず。

とあり、小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（享和三～文化三年〔一八〇三―〇六〕刊）にも、

金剛鑽ハ金剛石ノ一名也。ギヤマン石。（鉛）

今玉工用ル所ノ金剛シヤウト呼者ハ、合玉石〈青玉附録〉ニシテ、本条〈金剛石〉トハ別ナリ。（金剛石）

合玉石ハ、コンガウセウ、色赤黒キ砂ナリ。又黄赤色ナル

モアリ。形多ク稜角アリテ、玉石ヲ切或ハ磨クニ用ル砂ナリ。河州ノ金剛山、和州ノ生駒山等ヨリ出ス。又丹後、土州及諸州ニアリ。讃州ニハ大塊四五分ナル者アリ。又天工開物ニ、解玉砂ト云、通雅ニ、那砂ト云モ、皆此物ナリ。

（青玉）

とあり、さらに小野職孝〔一七七四―一八五二〕の『綱目多識編』（東洋文庫蔵）にも、

金剛シヤウ

合玉石〈本草綱目青玉附録〉解玉砂〈天工開物〉

玉石ヲ伐リ磨スルノ砂ナリ粒ニ大小アリ大ナル者ハ黄豆ノ如ク小ナルハ粟粒ノ如シ。質堅硬シテ紫赤色稜角アリテ物ヲキルニ利アリ土州産ハ赤ヲ帯フ讃州産ハ紫色ヲ帯フ本草書青玉附録云玉須此石碾之乃光云々一名碾玉砂ト云

とある。

「合玉石」は、右の引用文にあるように、『本草綱目』の「青玉」項の「附録」に「此即碾玉砂也。玉須二此石一碾レ之乃光（これは玉を碾る砂のことである。玉はこの石で碾り磨いて光が出る）」と説明されているものである。以降、金剛砂は合玉石に同定されることになるが、白井光太郎考註『大和本草』（有明書房　一九三二刊）の頭注に「脇水曰河内金剛山下ニハ金剛砂ヲ産スルコトナシ、金剛砂ヲ産スルハ金剛山ノ北三里ナル大和二上山ノ麓ニシテ二上山大字穴虫トイフ所ナリ。飛鳥川ニ産スト云フモ何カノ訛伝ナラン」とあり（脇水は『頭注国訳本草綱目』第三冊の薬名標目の和名・学名・英訳名を校定した脇水鉄五郎氏であろう）、「金剛砂」を「石榴石ヲ粉末トセルモノ」とする。以降、この金剛砂は石榴石とする説が採られている。

以上のように、本草学においては「金剛砂」また「金剛鑽」と同様に玉を擦り石を磨く堅い砂であり、「金剛石」もまた「金剛の石」すなわち堅い石でしかなかったのである(3)。

4　舶来の金剛石

西川如見の『増補華夷通商考』（宝永六年〔一七〇八〕刊）に阿蘭陀（フランタ）の「土産」の一つに「ギヤマン」を挙げ、

又デヤマンとも云。其色紫赤多し。鉄槌にて打ても砕けず、金剛石菩薩石の類なりと云。

と見える。これが西洋の「金剛石」のことを記した我が国最初の文章であろう。続いて『和漢三才図会』（正徳二年〔一七一一〕序）に、

一種有二伽曼玉一（正字未詳。）黒色而似二燧石一而有レ稜。甚堅剛、用レ之彫二鑿玉石磁器一皆如レ泥任レ意。自二阿蘭陀一来。疑彼国金剛石之類矣。

一種に伽曼（ギヤマン）の玉〔正字未詳〕というのがある。黒色で形は燧（ひうち）石に似ていて稜（かど）がある。甚だ堅剛で、これを用いて玉石・磁器を彫り鑿つと泥を彫るように意のままに彫れる。阿蘭陀から運ばれてくる。恐らくはこれは彼の国の金剛石であろう。（雑石類、金剛石）

と見える。

実際に西洋の「金剛石」が日本に舶来したのは十八世紀以降のことのようで、平賀源内の『物類品鷺』（宝暦十三年〔一七六四〕刊）に、

○蛮産デヤマン、壬午主品中、田村先生具レ之。ソノ大サ二分許是ヲ指彄（ユビカネ）ニ着ク。其ノ質水精白石英ノゴトシ。至テ明ノ徹ナリ。照（セバ）レ之、遠近左右悉クウツル。然ドモ近世偽造スル物多シ。試（ル）レ之ヲ法、鉄椎ヲ以テ撃テ傷ザルヲ真トシ、或ハ焼赤シ醋中ニ淬シテ如（ク）レ故ノ酥砕セザル等ノ法アリトイヘドモ此ノ物世人甚珍トス、其ノ価数十金ヨリ百金ニ至ル故ニ容易ニ試ガタシ。（金剛石）

と書かれている。ただ、当時はギヤマンを実際に見ることは稀で、誤解されることも多かったようで、右の説明に「照（セバ）レ之、遠近左右悉クウツル」とあるのは、木内小繁（石亭）の『雲根志』（安永元年〔一七七二〕刊）の「ギヤマン」の項に次のようにあるように、誤った伝聞によったものであろう。

蛮物ナリ。和産共に産所をきかず。伝（つたへ）云ギヤマンを持て石鉄焼物等に彫物をするに泥のごとくやはらかなりと。是までギヤマンといふ物数百見たり。いまだ真物を見ず。明和三年（引用者注―一七六六年）戊五月十八日会に出たり。予真偽をしらず。或人云阿蘭陀に八方目鏡といふものあり、ゆびがねに付て我うしろをうつす鏡なり、是と取違へ覚たる人有、別のもの也、と。又或説にギヤマンは石の名にあらず、かたき鉄石やき物にほそきことをほりたるをギヤマンぼりといふ、と。此説尤ならんか。かたき物をほるの石あらばすなはちギヤマンならんか。（巻二・采用類）

また、「かたき物をほるの石あらばすなはちギヤマンならんか」とあるように、堅い石をすべてギヤマンとも呼んでいたようである。

ギヤマンまたデヤマンは、以降ギヤマンデ、ヂヤマントなどの形でも現れる。いずれもDiamante（ポルトガル語）またはDiamant（オランダ語）の転音である。管見で拾い得た用例は以下のとおりである。

大槻玄沢『蘭説弁惑』（天明八年〔一七八八〕成、寛政十一年〔一七九九〕刊）

○かなのふる　ぎやまん

問曰。「かなのふる」「ぎやまん」と云ふ名あり。是れいかん。

答曰。（中略）「ぎやまん」は「ぢあまんと」なり。硝子類を調鑄するなど此石　を用ゆ。一体玲瓏たる玉石なり。別に訳説あり。摘芳の中に出す。

宇田川玄随『西洋医言』（寛政四年〔一七九二〕自序）

金剛石　謂二之斎亜満（ジヤマント）篤一

この例がギヤマンを明確に「金剛石」と訳した最初の例であろう(4)。Diamante（葡語）・Diamant（蘭語）・Diamond（英語）などは「打ち勝ち難き」の意味のラテン語アダマスadamasに由来する語であり（鈴木敏編『宝石誌』集英社大正五年刊〔一九一六〕p.138）、この語源からすれば、「金剛石」と訳すのは意訳と言える。

熊秀英（森島中良）『蛮語箋』（寛政十年〔一七九八〕刊）

金剛石（ギヤマン）　ジヤマント

小野蘭山『本草綱目啓蒙』（享和三～文化三年〔一八〇三―〇六〕刊）

金剛石　デヤマン蛮名　ギヤマンテ同上〔一名〕金剛砂〈典籍便覧〉跋折羅〈翻訳名義集〉伐羅闍　斫迦羅縛左羅〈共ニ同上〉

蛮人持来ル指環（ユビガネ）ノ飾トス。俗ニ誤テ、ギヤマンセキト云。状水晶ノ如クニシテ明徹ナリ。硝子（ビイドロ）ニテ偽ル者多シ。故ニ透シ見ルニ、内ニ気眼（アハ）アル者ハ真ニアラズ。真ナル者ハ玉ヲ切ニ泥ノ如シト云。　（金剛石）

金剛鑽ハ金剛石ノ一名也。ギヤマン石。　（鉛・集解）

『厚生新編』巻二十　雑集（文化八年〔一八一一〕訳）

ヂアマント　羅語アダマス、金剛石　俗云ぎやまん

此石ハ貴重の石品にして質甚ダ重し。価も亦高価たり。堅

剛透明にして鮮なる光沢あり。少しも色彩交ることなくして、宛も清水のごとく見ゆ。是を上品とす。黒色を帯び又黄を帯るものハ貴むことなし。（中略）硝子匠硝子を截り巧（さいく）するに用ゆ。これは「ヂアマント」の小なるものを木柄（え）の先キに[?]こみて其尖（さき）にて截るなり。

按にヂアマントハ玉石鐫するに用ゆとはこれなり。即チ金剛鑽なり。我方俗ギアマンと転訛し呼ぶ。近来上好舶来の硝子彫巧の有無をいはず、誤てギアマンと唱ふるもの多し。

宇田川榛齋『遠西医方名物考』（文政五年〔一八二二〕刊）

濶大ナル硝子壜ヲ取リ、其底面ニ墨ヲ以テ、仮ニ径七八寸許リ輪状ヲ記シ、金剛鑽（ギアマン）ヲ以テ深ク其輪囲ヲ鑽刻シ、

（巻一・硫黄精）

宇田川榕菴『舎密開宗』（天保七年〔一八三六〕序）

鑽石（ヂヤモンド）　（巻九・玻璨（ビイドロ））

注目したいのは、多くの著では硝子類を調鐫する石として紹介しているなかに、『物類品騭』と『本草綱目啓蒙』が西洋人が指輪の飾りにこの石を用いることを記していることである。

十八世紀当時の日本には宝石を身に飾る習慣はなかった。安土・桃山時代に南蛮貿易やキリシタン文化の影響によって、一部の日本人が装飾品として身に付けたことが当時の絵図から窺えるが、それもキリスト教禁教令によって直ぐに途絶えてしまったようである。しかし、十九世紀の江戸時代後期になると再び「宝玉・宝石」が装飾品として用いられるようになったようである。佐藤信淵（一七六九―一八五〇）の『経済要略』上巻の「開物第二」の「擬玉類」の説明に、

宝玉・宝石・珊瑚・琉璃・琥珀・瑪瑙等皆擬造スルノ法アリ。此も亦貧賤ナル士女ノ服玩ニ飾リ、其心意ヲ娯楽セシメ人世ヲ鼓舞シ蒼生ヲ撫御スル所以ノ具ナリ。

と見える。ただ、この「宝石」は『本草綱目』と同じく、「金剛石」はその中には含まれていなかったものと思われる。

幕末には柳河春三編『西洋雑誌』（慶応三年〔一八六七〕創刊号）に「ヂヤマントは天下第一高価の物なる話」という記事があり、

ヂヤマント漢名鑽石。又金剛石といふ。（中略）其堅き事万物に冠たり。之を琢（みが）きて稜を尖くなし、柄に嵌（は）めたる者、以て水晶をも玻璨をも切るべし。…価格甚貴からず。稍（やや）大粒なるものは琢きて飾となす。其価の高き事本文に云

へるが如し。

とあって、重さの単位カラートと価格との関係や、金剛石をめぐる逸話が書かれているが、これは外国の話である。『米欧回覧実記』の明治六年〔一八七二〕三月二日条に、

金剛石（ヂヤモント）ノ磨礱場ハ、府中ノ第一ナル高名場ニテ、欧州各国ニ於テ、金剛石ノ流行ハ甚ダ盛ンナレドモ、（中略）支那ノ古時ニ、夜光璧ヲ記ス、恐クハ此金剛石ナラン

（第五十六巻、奄特坦府ノ記）

とあり、欧州各国での「金剛石（ヂヤモント）」の流行を伝えてはいるが、この文章からも我が国においてその流行があったということは窺えない。

ちなみに『米欧回覧実記』が書かれた明治六年はキリスト教禁制の高札が撤廃された年であるが、当時日本で読まれていた聖書は漢訳であり、その訓点本であった。その中に「金剛石」が現われる。『旧約聖書』「出エジプト記」第二十八章に裁きの場に臨む司祭の胸当に嵌め込まれる十二の宝石の一つとして現れるのがそれである。

一行必為瑪瑙、黄琮、瓊玉、此為第一行、第二行緑玉、青玉、金剛石、第三行赤璋、白瑪瑙、紫玉、第四行黄玉、碧玉、粋玉。（漢訳『旧約全書』（Bridgman と Culberston による訳、一八六三年刊）

西洋における装飾宝石としての金剛石のイメージは、こうした書物からも得られていたものと思われる。

5　明治期における「金剛石（ダイヤモンド）」

明治期に始まった我が国の鉱物学における鉱物の捉え方は本草学におけるそれとは異なる。生活に要不要といった観点からではなく、鉱物そのものを物理学的にまた化学的に分析する。例えば明治八年に文部省から刊行された『氏初学須知（オ）』の「金剛石」の説明は「金剛石ト石炭ト全ク同質ナルコトハ、化学ノ発明中最モ奇異ト称スル一事ナリ。金剛石ハ他物ニアラズ即チ純粋石炭ノ結晶セル者ナリ」という化学成分の説明から始まり、輝きについても次のように説明されている。

金剛石ヲ菱形ニ截断シ、指環ニ附ケテ光輝ヲ透過セシムル者ヲ光輝金剛石（ブリヤン）ト云ヒ菱形ヲ成サズ直ニ錠板ニ附クル者ヲ薔薇金剛石（ローズ）ト云フ。光輝金剛石ハ薔薇金剛石ニ比スレバ光線ニ触ル、時其光輝更ニ鮮明ナリ。

金剛石ハ通常無色ナレドモ、亦黒色ノ者アリ「イアサント」草ノ名色ト称スル黄色アリ緑色アリ薔薇色アリ。世人最モ薔薇色ノ者ヲ愛ス。金剛石ハ大ニシテ内部ノ璺路少ク、光輝美麗ナシテ製作ノ巧ニ因リ、光輝更ニ鮮ナレバ其価モ亦従ヒテ貴シ。

「光輝金剛石」「薔薇金剛石」というのは brilliant 型、rose 型といったカットの仕方による名であろうが、金剛石はこうしたカット法が開発されたことによって、その輝きは一層増すことになった。宝石たる必須条件の第一は、美しい色彩と輝きにある。宝石学の説明によると、金剛石の光線を屈折する力は強大であり、直線に投射する光線もその屈折率によって直射せず、石内に返射して、いわゆる金剛光沢を現わすのである。こうした研究と開発によって宝石としてのダイヤモンドの価値はより高いものとなる。鈴木敏編『宝石誌』に当時の宝石の分類についての簡潔で要領を得た説明がある。

宝石は通常之を区分して二とす。其一は金剛石、紅宝石などの如く質堅剛にして色彩、光沢共に完備し、其透明の度も亦鮮にして産出稀少、指環、頸飾等凡て貴重の宝飾に供せらるゝもの、之を正宝石 The Precious Stones or Jewels と称し、支那の所謂璧璽なるもの是なり。其二は水晶玉の如く器物等の装飾に用ひらるゝもの、之を半宝石 Semi-precious Stones と称す。

これによると、正宝石には「金剛石」、「剛玉石」（紅宝石、藍宝石等を含む）、「緑柱石（瑠璃）」（緑宝石・水緑宝石等を含む）、「尖昌石」、「金緑石」（アレキサンドル石等を含む）などが含まれるが、その筆頭に挙げられる「金剛石」は、その硬さにおいて他の正宝石を遥かにしのぐのである。こうした西洋におけるダイヤモンドに対する知識と価値観が明治時代の日本の「金剛石」にそのまま持ち込まれたのである。

6　装飾具としての「金剛石」の流行

衣服が変われば装身具も変わる。装飾具としての宝石が日本で流行したのは衣服が西洋式になってからのことである。鈴木敏編『宝石誌』（秀英社大正五年刊、昭和四十九年〔一九七四〕思文閣復刻）に、

我国維新以来欧米との交通開け、倍々頻繁となるに迫び、彼の国に於て珍重又は流行する宝石も亦従て本邦人の愛用

とどまる(6)。

○金剛石(こんごうせき)もみがかずばたまの光はそはざらん。ひとも学びて後にこそ、まことの徳はあらわるれ。

（唱歌・金剛石、明治二十年〔一八八七〕昭憲皇太后作詞）

○さてイヽダ姫の舞ふさまいかにと、芝居にて贔屓の俳優みるこゝちしてうち護りたるに、（中略）たわまぬ輪を画きて、金剛石の露繻(こぼ)るゝあだし貴人の服のおもげなるを欺きぬ。　（森鷗外『文づかい』明治二十四年〔一八九一〕）

○あはれむべし、粕壁譲、弄笛、汝が魂を慰するに足らず、声は、宙空にさまよふを嫌ひて、肉に耽らざれば休まず。金剛石の指環、死後にのこれども、指端また風塵を躍らするの妙なし。

（『女学雑誌』明治二十七年〔一八九四〕三十一号）

○水色鼈甲の松竹梅の花弄、平打の銀簪のうしろざしに、金剛石入の根掛あらはに見え透きて、そろへたる白襟に領元うるはしくて、

（『太陽』明治二十八年〔一八九五〕二月号）

○眼を開けて高く天を望めば、緑りなる水晶の如き天の一面に、金剛石の如き群星は輝けり。

する所となり、加ふるに男女衣服の制も亦之を欧米に模倣すること尠からざれば、指環、頸飾、胸針、扣鈕、襟留、束髪の装飾等に宝石を用ゆること多く、現今本邦人の上流にある紳士、淑女は勿論、花柳社会に身を委する男女にして指環又は簪、櫛、笄、帯留、其他装身具の装飾として多少宝石を保蔵せざるものなく（下略）、

とあるが、既に明治二十年頃にはそれは盛んであったようで、明治二十一年刊の和田維四郎著『宝石誌』には、

余鉱物学を修めて既に十有余年、其間嘱託を受けて鉱物を監査すること少なからず、其之を閲するに十中の八・九は金炭(ママ)にあらざれば即宝玉なり、近年に至り益々多きを加ふ、以て世人宝玉を鍾愛するの情知るべきなり。

と書かれている（久米武夫著『新宝石学』風間書房昭和四十一年〔一九六六〕刊の引用による）。

このようにして、日本でも宝飾品として流行するようになった「金剛石(ダイヤモンド)」は、文学作品にも描かれるようになるが、その取り上げ方には二つある(5)。一つはその輝きに注目しているものであり、一つはその高価さに注目しているものである。

その輝きを描いているものは極めて少なく管見では次の例に

（『女学雑誌』明治二十八年〔一八九五〕六号）

○夜など、まっ黒き空に金剛石をまき散らしたるよう

（徳富蘆花『不如帰』明治三十一年〔一八九八〕）

これに対して、富の象徴として描かれたものは多い。そのいくつかを挙げる。

○眼孔大なりと雖も、胆の大なるに非らず、面色白しと雖も、心の白きにあらず、況んや区々の綺羅宝玉の類に於てをや、金剛石の大小、豈に能く人生の真価を軽重するものならんや（「日本婦人論（二）」『国民之友』四号、明治二十年〔一八八七〕）

○茅屋中の百姓に至る迄も亦た此の貴族的の性質を帯びたる者かり、上等社会の貴婦人が、一夜宴会の修飾に当る金剛石指環の代償は、夫婿一ケ年の年俸を以て之れに当るも猶ほ足らざるなり（「日本国民の気風に関して」『国民之友』三十一号、明治二十一年〔一八八八〕）

○瑠璃の手箱の中に入って居るものは大抵真珠か金剛石だが、（幸田露伴『露団々』明治二十二年〔一八八九〕）

○夫がソノ急にナ、他に金剛石の払い物ガあつて、夫を買ひに往きましたが、大きサが一寸からあつて六円ださうで、（落語口演速記『百花園』三巻四十号、明治二十三年〔一八九〇〕一月十日）

○彼は忙々しく顔を擡げて紳士の方を見たりしが、其人よりは其指に耀く物の異常なる駭かされたる体にて、「まあ、那の指環は！一寸、金剛石？」「然うよ。」「大きいのねえ」「三百円だつて。」

（尾崎紅葉『金色夜叉』明治三十一年〔一八九八〕）

○「其指輪は見馴れませんね」「是？」と重ねた手は解けて、右の指に耀くものをなぶる。「此間父様に買つて頂いたの」「金剛石ですか」「さうでしやう。天賞堂から取つたんですから」（夏目漱石『野分』明治四十年〔一九〇七〕）

○そして友達と雑談するとき、「小説家なんぞは物を知らない、金剛石入の指輪を嵌めた金持の主人公に manila を呑ませる」なぞと云つて笑ふのである。

（森鷗外『鶏』明治四十二年〔一九〇九〕）

明治以降、宝石は上流階級や特定の富裕層の象徴であり、金剛石はその中でも最高のものとして認識されていたことをこれらの文章はよく示している。かつて堅固な信仰心などを象徴した「金剛」は、明治以後、金剛石が装飾品として用いられる

ようになって、まったく変化してしまったのである。やがて、「金剛石」という名は用いられなくなり、ダイヤモンド（ダイヤ）という外来語名が使われるようになるのは、こうした変化と無関係ではないだろう。

〔注〕

（1）例えば岩本裕『日常仏教語』（中公新書　一九七二刊）の中にも「金剛」の語は見られる。

（2）諸橋轍次の『大漢和辞典』に『晋書』地理誌の「梁者言二西方金剛之気強梁一、故因名焉」を引く。

（3）『本草綱目』の「主治」の項には「磨レ水塗三湯火傷一」。作二釵・鐶等一服佩辟二邪悪一」（水に磨つて湯火傷に塗る。釵、鐶等の装身具として佩ぶれば、邪悪、毒気を辟ける）とあり、中国では薬物や呪具としても用いられていたようである。

（4）劉正埮埮高名凱等編『漢語外来詞詞典』にはダイヤモンドの訳語としての「金剛石」を日本からの輸入語としている。ちなみに英語 diamond の訳としての「金剛石」が現われるのは、幕末から明治初めの頃である。

ヘボン『和英語林集成』（初版　慶応三年〔一八六七〕刊）KON-GŌ-SEKI 金剛石、n. The diamond.

『改正増補　英和対訳袖珍辞書』慶応三年〔一八六七〕刊 Diamond. s　金剛石。活版ノ最小キ字。

『和訳英辞書』（明治三年〔一八六九〕上海 americn pres-byterin missn press 刊）

Diamond.s　金剛石（コンガウセキ）。活版（クワツジ）ノ最小（モットモキ）キ字（ジ）。

右の説明に「活版ノ最小キ字」とあるのが注目されるが、これは漢字の脇にその読みを示すために付けられる小さな仮名、現在ルビと呼ばれるものを指す。これは十九世紀後半イギリスで、文字サイズの名称を、エメラルド（6.5ポイント）、ルビー（5.5ポイント）、パール（5ポイント）、ダイアモンド（4.5ポイント）と言っていたことによると言う（屋内恭輔『XMLがわかる本』毎日コミュニケーション　二〇〇二刊、P120）。

（5）明治以降の用例については、徳富蘆花『不如帰』と尾崎紅葉『金色夜叉』は名著復刻全集近代文学館により、夏目漱石と森鴎外のものは岩波書店刊の全集を用いたが、その他の用例については服部匡本学教授の協力により、

神戸大学新聞記事文庫、青空文庫、太陽コーパス、近代女性雑誌コーパス、口演速記などから得られたものを用いている。引用にあたっては、読みやすさの便を謀り、ルビを省略したり、新たに加えたものがあるが、「金剛石」のルビについては原文のとおりである。ルビの有無や語形の違いについて考えるべきこともあるが、後考を俟つ。

（6）明治時代の用例ではないが、宮沢賢治の作品には鉱物の特徴を利用して情景を描写したものが多いことが知られているが、『銀河鉄道の夜』大正十四年〔一九二五〕頃成）にはダイヤモンドか次のように用いられている。

またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと穫れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばら撒いたという風に、眼の前がさあっと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦ってしまいました。